吉益南涯　医案④

浪華島之内の賈人、伊丹屋某なる者、嘗て腹痛を患う。腹中に一小塊有り、之を按ずれば則ち痛み劇しく、身体は尫羸、面色は青く、大便　通じ難きも、飲食　常の如し。乃ち大柴胡湯を与う。之を飲むこと歳余にして、少しく差ゆ。是に於いて病者、徐怠慢して薬を服さず、既にして七八月を経て、前証復発す。塊　前日に倍し、頗る冬瓜の如く、煩悸・喜怒　劇しければ、則ち狂の如し。衆医　交々療するも差えず。復た治を請う。先生　再び与うるに前方を以てし、当帰芍薬散を兼用す。之を服すること月余、一日、大いに異物を下す。其の形状　海月の如く、色　灰白にして、形　嚢に似たる有り。内空虚にして、以て水醤を盛るべし。其の余は、或いは円く、或いは長く、或いは大、或いは小、或いは紐に似たる者有り、或いは黄色の魚餒の如く、或いは敗肉の如く、千形万状、枚挙すべからず。此の如きこと九日にして後、旧痾　頓に除かる。